

三角縁対置式系神獣鏡の図紋

——“神守”銜巨と旄節と“乳”をめぐって——

西 田 守 夫

1. はしがき
2. 三角縁神獣鏡の銘文—“神守”龍虎銜巨
3. 環状乳神獣鏡の銘文—天禽四守，銜持維綱
4. 三角縁神獣鏡の銘文—仙人執節坐中庭
5. 漢末呉代の対置式神獣鏡の維綱の銜え方
6. 三角縁対置式系神獣鏡の維綱の銜え方と獣頭の向き方

論文要旨

報告の課題は“奈良朝以前における日本出土鏡の分類論を中心として”述べることなので、本稿で取上げた資料は、従来は“舶載”とされてきた三角縁神獣鏡である。三角縁神獣鏡の形式分類がその内部のみで可能とは考えられないが、製作の初期に内区に取りこまれた神獣鏡諸形式のうち、環状乳式・同向式・対置式は特殊形式として処理されたこともある。対置式は元来内区に四乳がないから、三角縁神獣鏡の内区に取りこまれた後も乳に囚われずに見れば、対置式直系に近いものと、三角縁神獣鏡独特の、言わば第二次対置式として展開する端緒になったものとを分けることが出来る。後者の系譜を考えるには三角縁神獣鏡の図像の意味を考えながら分類することが必要らしい。従って本稿においては、三角縁神獣鏡の系譜分類の前提になると思われる問題を述べた。

ところで、三角縁神獣鏡と呼ぶためには幾つかの条件が必要とされ、さらに異常に目立つ特徴が指摘されている。その特徴として日本の研究者の所謂笠松紋様、および内区を画する四乳(ないし六乳)、および鈕をめぐる小乳などがある。本稿では“笠松紋様”を銘文によって仙人の節とし、文献と図紋から旄節ないし旄とし、節の旄は二十八宿の昴と考えた。また銘文にある龍虎を代表格とする“神獣”の銜む“巨”も目立つ特徴であり、環状乳神獣鏡の銘文によると四獣の銜む“維綱”である。従って環状乳神獣鏡の系譜をひく対置式神獣鏡においても維綱の突き出る鈕は天蓋であるが、鈕と乳とはその座(鈕座・乳座など)や周田の象徴的図紋から考えると日月星辰でもある。

三角縁神獣鏡製作の初期には独特の対置式を作るため、神像の正面化とともに、元来鈕座から斜めに出ていた維綱を、旄(昴)や大小の乳に繋ぎ代えて水平にし、獣形の顔を正面に向ける工夫がされたと考えられる。ただし維綱と、乳や昴以外の星宿との関係は、図紋について具体的に述べなくてはならない問題である。